

模擬講義を活用したリクルーティング：中国，タイにおける 名大巡講の実施

国際教育交流センター教育交流部門

伊 東 章 子¹

1. これまでの経緯と計画

教育交流部門では平成26年度より、模擬講義を活用したリクルーティング、すなわち「名大巡講」を実施している。名大巡講は本学の教員が協定校を訪問して行う模擬講義で、講義の場を通じて本学の教育・研究内容を発信し、さらには参加者の大学院への進学意欲を高めることを目的としている。講義に合わせて大学説明会を実施し、本学の留学情報も発信している。平成26年度はインドネシアと中国において、また平成27年度は中国、ベトナム、タイで開催した²。過去2年間にアジア各地で実施した名大巡講の参加者は合計で800名にも及ぶ。近年国際的に大学院留学生の獲得競争が激化しており、世界各国の大学や留学エージェントがアジア各地で留学フェアや相談会などを開催している。しかしこのところ留学フェアはどこも苦戦しており、思ったほどの来場者が集まらないことも多い（しかも留学フェアの参加費は年々上昇している）。このような状況を鑑みると、本学単独だけでこれほどの参加者を集められる名大巡講は、留学希望者へのアウトリーチという面では非常に有効である。

名大巡講の一番の特徴は、本学教員と参加学生とのface-to-faceの交流にある。過去の経験では、講義終了後に参加学生が担当講師に近づき講義内容について踏み込んだ質問をしてきたり、時には自分の研究関心などを話し込む場面が多くみられた。名大巡講が主なターゲットとするのは大学院留学を希望する学生たちである。大学院で学ぶことの面白さを伝え、専門性

を有することの意義を伝えられなければリクルーティングとしては成功しない。教員との交流を通じて日本留学やひいては本学について関心を高めてくれることが、大学院リクルーティングとしての名大巡講が目指すところである。

過去2年間の実施を通じて、特に中国の協定校関係者の中で名大巡講に対する知名度と評価が高まり、積極的に受入れを申し出てくれる大学も多くなってきた。また過去の名大巡講の参加者がNUSTEPやNUPACEなどの本学の留学プログラムに参加したり、G30やCSCに応募したりする事例が増えつつある。そのため、協定校からの留学生の受け入れ拡大を目指して、平成28年度も継続して名大巡講を実施することとなった。

今年度の実施国には3年連続となる中国、そして前年度に引き続いてタイを選定した。名大巡講は講義に足を運んでくれた学生に対するリクルーティング活動であるだけでなく、協定校との人的交流の促進や、ひいては実施国における本学のブランド力強化という多岐にわたる戦略性を併せ持つ。講義を実施する際には協定校関係者との懇談の場を必ず設けるため、今後の国際交流について率直な意見交換もできる。訪問校の選定には各国における事業方針を考慮して決定する必要があるため、中国交流センターおよびバンコク事務所と協議を重ねて検討を行った。

中国での訪問校には西安交通大学、中国科学技術大学そして南京大学を選定した。3大学とも名大巡講を実施するのは今回が初めてである。かつては西安交通

¹ 本稿の執筆にあたっては、昨年度の講義担当者らから協力を得た。本学工学研究科・曾剛先生、農学研究科・村瀬潤先生、情報学研究科・フランチェスコ・ブシェーミ先生、バンコク事務所・ウィラヤー先生にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

² 平成26年度の活動内容については伊東章子「模擬講義を中心とした海外リクルーティング」『名古屋大学国際教育交流センター紀要第2号』（2015）を、また平成27年度の活動内容については伊東章子「模擬講義を活用したリクルーティング：中国，タイにおける名大巡講の実施」『名古屋大学国際教育交流センター紀要第3号』（2016）を参照のこと。

大学と南京大学の両校からは本学大学院へ進学者が毎年出ているが、直近7年間は進学実績がほぼない。模擬講義の実施を通じて本学への関心を再び掘り起こすとともに、両校関係者から近年の両大学の日本の大学院への送り出し事情についてヒアリングを行うことにした。中国科学技術大学は本学の全学間協定校ではあるものの、現在は本学とのアクティビティがほとんどなく、没交渉になってしまっている。名大巡講を行うことで、交流を活発化させる糸口にしたいと考えた。

一方のタイでは、これも昨年引き続き本学の全学間協定校であるカセサート大学とチュラロンコン大学を訪問することにした。タイは本学の国際戦略上の重要地とされ、本学事務所も設置されている。また本学日本人学部生を対象にした短期海外研修なども開催している。しかしこのような様々な試みが行われているわりに、残念ながらタイからの留学生数は伸び悩んでいる。JASSOの外国人留学生在籍調査と比較すると、もう少しタイからの留学生を呼び込みたいところである³。昨年度と継続して講義を行うことで、両校における本学のプレゼンスを高めたい。

さらにタイでは、今回初めて高校にも訪問することになった。Mahidol Wittayanusorn Schoolである。Mahidol高校はタイ屈指の最難関校で、理系に特化した高校である。卒業生を日本を含む世界の有名大学に進学させている。本学の学部G30国際プログラムでも過去に卒業生を受け入れた実績がある。名大巡講は大学院リクルーティングを目的とするため、これまで大学のみを訪問してきたが、バンコク事務所のリクエストもあり、今回試験的に高校も訪問することになった。国際関係の予算の減額が続く中で、リクルーティングに充てられるコストも人材も縮小することが避けられない。名大巡講でもスケジュールを効率的に組み、大学だけではなくアジアの有名高校にも足を運ぶ機会を確保できるよう努力してみたい。

2. 中国における活動の概要

【実施スケジュール】

西安交通大学（2016年11月2日）、中国科学技術大学（2016年11月4日）、南京大学（2016年11月5日）

【講義担当者】

国際教育交流センター教育交流部門・伊東章子（国際言語文化研究科）、曾剛（工学研究科、中国交流センター副センター長）、理学研究科生命理学科・鈴木孝幸

1) 西安交通大学における活動の概要

西安交通大学は中国国家教育部が直轄する211工程大学である。キャンパスは中国の歴史古都・西安にある。開学は1896年と大陸中国の中でも歴史が古い大学の一つである。2016年には盛大な創立120年式典を開催している。情報通信、機械工学、材料工学、エネルギー工学などの分野に強いと言われているが、その他の幅広い分野でも国家重点実験室を有するなど、科学技術の研究・教育全般の評価が高い。2016年の中国校友会網による中国大学ランキングでは大陸中国の中で第10位に位置している。

前述したように、7、8年前までは西安交通大学を卒業した学生が本学の工学研究科や理学研究科大学院に進学するケースが毎年ようあったが、最近は本学への進学が途切れてしまっていた。

【文系講義】

伊東「近代日本の科学・技術観：モノづくりの系譜」
大学説明会

文系講義は外国語学院日本語学科主催の講演会として開催された。会場には同学科の学部生、大学院生、教員が集まった。西安交通大学の日本語学科の規模は一学年40名である（クラス規模は、中国国内の国家重点大学の日本語学科はどこも同程度である）。参加学生の日本語能力は非常に高く、質疑応答も含めて日本語でスムーズに進んだ。今回はよりインタラクティブな講義にしようと、講義中にたびたびクイズタイムをはさんでみたが、どの学生も熱心に回答を考え、積極的に答えを披露していた。

講義後の進学説明会では、本学のNUPACE（交換留学プログラム）に関する質問が多く出た。日本語学科教員の話によると、同学科の学生の半数近くが半年から1年間の交換留学プログラムに参加して、日本の大学に留学しているそうである。実際に講義参加者の一人も1年間の交換留学から帰って来たばかりだった。

³ JASSOの外国人留学生在籍調査によると平成24年からの過去5年間でタイ人留学生の数は1.6倍に増えている。

学生の中には大学院生は交換留学プログラムに参加できないと思込んでいる者もいて、大学院生ならではの交換留学プログラムの活用方法（修士論文に必要な資料収集など）を提案すると熱心にメモを取って聞いていた。

日本語学科教員との意見交換会では、本学の日本語教育学関連の博士後期課程の学生を1年間教員として招聘したいという申し出があった。同学科ではこれまでも日本の博士後期課程の学生を教員として招いた経験があり、本学ともそのような交流機会を持ちたいとのことだった。本件については後日国際言語文化研究科で検討することとなった。

【理系講義】

- ・曾剛（工学）‘Embedded Computing Systems for Energy Conservation’
- ・鈴木孝幸（理学）‘Quantitative approach to understand whole organ deformation dynamics in the chick limb’

大学説明会

理系講義は特定の部局によるのではなく、西安交通大学国際交流処主催の学術講演会として開催された。講義に先立って、国際交流処関係者と意見交換を行った。本学中国交流センターを窓口として国際交流担当者との交流は保ててはいるものの、残念ながら学生交換の流れは以前の勢いがなくなっている。そのため意見交換の場では、まずは協定校として学生を送りだしやすいNUSTEPについて積極的にアピールを行った。先方の評価は、夏季はNUSTEPと同じような短期プログラムの案内が世界中から集まるが、春季（2月）にこのようなプログラムが開催されることはほとんどないとのことだった。そのため2月にはまとまった数の学生を派遣したいという申し出があった。後日NUSTEP関係者と議論してもらうことになった。

講義には理工系を中心として、講義テーマに関心を持つ学生が参加した。参加者の英語能力は総じて高く、質疑応答もスムーズに行われた。参加者に尋ねてみたところ、名古屋大学のことを知らないと言った学生が多かった（ちなみに日本の大学で知っているところはあるかと尋ねると、大抵東京大学と早稲田大学の名前があがる）。純粋に講義タイトルに惹かれて講義に参加したようである。過去の経験から、中国の大学

では学生がキャンパス内に居住しているため、授業時間終わりの夜間に講義を開催すると、その分野に関心のある熱心な学生が集まってくれることが分かっている。西安交通大学のケースが示すように、学生が関心を持つような講義を用意することで、本学の名前さえ聞いたこともない学生たちにも日本の名古屋大学という大学の存在を知ってもらうチャンスになる。

2) 中国科学技術大学における活動の概要

中国科学技術大学（英語名：University of Science and Technology of China）も211工程大学の一つで、安徽省合肥市に位置する。中国科学院直属の大学として、古くから中国の科学教育の中心地であり、多数の科学者・技術者を養成してきた。現在でも理科や数学に高い才能を示す小学生を集めた飛び級プログラムなどを大学内で開講し、大学教員がその教育に当たっている。中国科学技術大学は近年、物理分野、原子力関連技術の研究で世界的に名高い業績をあげている。2016年の中国校友会網による中国大学ランキングでは大陸中国の中で精華大学、北京大学と肩を並べて3位に入っている。その名のとおり、かつては科学技術分野の大学であったが近年は社会科学や人文分野の拡充にも力を入れているが、日本語学科はなく、日本語は第二外国語として教えられているのみである。そのため中国科学技術大学では理系講義のみを実施することになった。

本学とは2003年に大学間協定を締結した。本学の部局の一部では中国科学技術大学と教員同士の交流があるものの、学生交換に関してはこれまであまり実績がない。中国交流センターから今後中国科学技術との交流機会を増やしたいとの要望があり、名大巡講の実施を決めた。

【理系講義】

曾、鈴木、大学説明会

講義の前にまず、中国科学技術大学国際交流処関係者と、今後の交流の可能性について意見交換を行った。先方からは本学からの客員教員派遣と、JSTのさくらサイエンスプログラムへの共同申請について要請があった。中国科学技術大学の関係者によると、同プログラムについては中国科学院科学技術振興局から中国国内の重点大学に向けて積極的に応募する旨の指導が

あるとのことだった。そのため現在中国の重点大学の多くが、さくらサイエンスプログラムのパートナーとなる日本の大学を探しているようである（中国科学技術大学とのさくらサイエンスプログラムについては後述する）。

本学からはNUSTEPやNUPACEについて説明を行った。中国科学技術大学においてもNUSTEPに対する関心が強く、早速学生を派遣したいという申し出があった。中国科学技術大学を訪問したのは2016年11月だったが、その後すぐに募集の始まった2017年夏季のプログラムに早速4名の応募者があった。NUSTEP開始時から中国科学技術大学にはパンフレットや案内などを毎回送ってはいたのだが、これまで一人も応募者がいなかった。名大巡講での訪問をきっかけに、国際交流担当者と顔が見える交流を果たすことで、すぐに目に見える成果が表れた一例である。

講義は中国科技大学で一日の授業が終わる午後6時より開始した。二つの講義を隣接する会場で開催したが、どちらにも40名前後の学部学生が集まった。特に発生学（理学・鈴木）の講義に関しては、中国科学技術大学で発生学を扱う研究室がないために、学生たちは非常に熱心な様子で講義を聴いていた。講師が日本から用意してきた鶏の胎児のサンプルに強い関心を示し、着色技術やサンプルの保存方法などの実験手順について詳細な説明を求める者もいた（この学生に関しては、今回の講義を通じて発生学という分野に関心を持ったようで、講義終了後に本学理学研究科生命理学科についても詳しい説明を求めていた）。講義中のやり取りを観察する限り、参加者の英語能力は非常に高く、過去に訪れた本学協定校の学生と比較してもその高さが際立っていた。

講義には強い関心を示してくれたものの、西安交通大学と同様、参加者の間で本学の知名度はあまり高くなかった。それでも将来は海外の大学院に進学を希望する学生がとても多く、本学リクルーティングの可能性は十分あると思われた。そのためにもまずは名大巡講のようなアクティビティやNUSTEPやNUPACEへの参加を通じて、本学のプレゼンスを地道に上げる必要がある。

3) 南京大学における活動の概要

南京大学とは中国の協定校の中で最も早い1982年に全学間協定を結んでいる。既に30年にもわたる協定関

係が続いており、本学に対して特に友好的な大学だといえる。2015年秋に当時就任したばかりの本学松尾総長が南京大学を表敬訪問した際にも、両校の総長がともに長きにわたる友好関係を高く評価していた。

一方、この長く友好関係にある南京大学からも近年本学大学院への進学実績は伸び悩んでいる。NUPACEなどの交換プログラムには参加者があるものの、それが大学院進学へとは結びついていないのが現状である。

【文系講義】伊東，大学説明会

文系講義には外国語学院日本語学科の3、4年生と大学院生、教員そして周辺大学の教員などおよそ60名が参加した。同大学日本語学科は日本語語学だけではなく広く日本研究を網羅するカリキュラムを編成している。そのため学生の研究テーマも非常に幅広く、日本の近代史について詳しい知識を有している学生や、日本のマスメディアについて調査を行っている学生などがいた。同学科のカリキュラムでは日本の技術史は取り扱っていないものの、日本の技術力に関心を持つ学生は多く、近年の中国の技術発展と比較しながら様々な議論が展開できた。

講義終了後の大学説明会では後期課程進学についての質問が多かった。かつては中国の日本語学科の学生たちは、学部終了後に日本の博士前期課程に進学するケースが主流だった。しかし近年、中国の特に研究大学では大学院教育を充実させているため、本学の協定校の日本語学科においても大学院教育に力をいれるようになってきている。そのため日本語学科学部卒業生が、中国国内の大学院に進学するケースが増え始めている。日本の文系大学院にとっては複雑な状況ではあるものの、中国国内で修士を修めた学生でも、博士号は日本で取得を希望する学生はまだ多い（海外の大学で博士号を取得した方が、中国の大学でアカデミックポストに就くためには圧倒的に有利であるため）。そのため大学説明会においても後期課程の大学院入試やCSC「中国国家建設高水大学派遣」プログラムの説明に十分な時間を割いて対応した。

【理系講義】

曾，鈴木，大学説明会

理系講義に関しては南京大学から専門性の近い学生に向けて講義をしてもらいたいという要望があったため、工学院（曾）および生物科学院（鈴木）で講義を実施した。午後の授業がまだ行われている時間帯であったが、それぞれの講義に約50名の学部生、院生、教員が集まり大変な盛況だった。専門分野の近い教員も複数参加していたために、講義内容を越えた将来の研究交流についても議論が及んだ。南京大学の学生の英語運用能力は概ね高いが、それだけではなくディスカッションに積極的な姿勢が見て取れた。これまで訪問した大学を振り返ってみると、学生の授業への参加姿勢、特に議論への主体的な参加は大学によってバラつきがみられる。恐らくその大学の教育方針のような物が、模擬講義にも反映するのであろう。

大学説明会では、研究生やの応募方法やCSCの手続き、ポストクなど様々な質問が寄せられた。今回訪問した西安交通大学や中国科学技術大学と比べると、南京大学では本学の知名度が格段に高かった。やはり長い年月をかけて協定関係を維持してきたことが本学のプレゼンスにも大きく影響を及ぼしていると思われる。半面、知名度の高さが必ずしも近年の大学院進学実績に結びついていないことが分かった。南京大学には今後、本学に対する関心の高さを実際の出願手続きにまで結びつけるようなフォローアップが必要である（このフォローアップについても後述する）。

3. タイにおける活動報告

【実施スケジュール】

カセサート大学, Mahidol Wittayanusorn School(2017年1月20日), チュラロンコン大学 (2017年1月23日)

【講義担当者】

国際教育交流センター教育交流部門・伊東章子（国際言語文化研究科）、生命農学研究生・村瀬潤（バンコク事務所副所長）、フランチェスコ・ブシェーミ（情報科学研究科）

1) カセサート大学での活動の概要

昨年度に引き続きカセサート大学を訪問した。現在本学生命農学研究科とカセサート大学農学部がジョイントディグリープログラムの実現に向けた議論を進めていることから、今年度は生命農学研究科から名大巡

講に講師の参加を得ることとなった。カセサート大学は名大巡講の開催に協力的で、バンコク事務所を通じて受け入れを要請したところすぐに快諾の回答が得られた。本学との交流に意欲的であることがうかがえる。

【文系講義】

伊東「民間鉄道会社の経営戦略と都市文化の発展」
大学説明会

講義は人文学部東洋言語学科日本語講座にて行われた。その時間帯に授業のない学部生や院生、教員らが40名ほど参加した。タイでは中国の大学とは異なり、模擬講義に参加する学生の日本語能力にばらつきが見られる。特に1、2年生などはまだ日本語で行われる講義を聞き続けるだけの日本語能力が身につけていないケースも多い。そのためタイでの日本語による模擬講義では、スライドに仮名をふったり、画像やビデオを多用するなどの事前準備が必要である。また参加学生の中に日本語能力の高い者がいればキーワードを通訳させるなどの工夫も求められる。模擬講義の目的を考えれば、学術的な専門性の高さばかりを求めるのではなく、参加者が新しい知識が得られたという達成感を得て、もっと日本の文化や歴史について学びたいという意欲を喚起できるかが重要である。

大学説明会ではNUSTEPについて関心を持つ学生が多かった。やはり2週間という気軽に参加できる長さ、廉価な参加費が魅力のようである。日本語を専門的に学んでいるものの、まだ日本を訪れたことのない学生がほとんどなので、まずはNUSTEPで来日を果たし、日本語をもっと上達させてから、将来のことを考えたいと話す学生が多かった。実際、模擬講義のすぐ後にカセサート大学から初めてNUSTEPへの申込者があった。中国科学技術大学と同様、模擬講義の実施がNUSTEPへの参加に結びついた例である。

【理系講義】

村瀬 “Diversity and functions of microeukaryotes in a rice field soil”
ブシェーミ “The Quantum between ‘it’ and ‘bit’”

理系の講義はカセサート大学のアレンジで、それぞれの専門性に基づいて農学部（Faculty of Agriculture, 村瀬）と理学部（Faculty of Science, ブシェーミ）

で行われた。

農学部での講義には早朝の時間帯だったにも関わらず、学生や教員を合わせて30名ほどの参加者があった。生命農学研究科が同大と進めているジョイントディグリープログラム(JDP)関係者も出席し、本JDPを周知し、開設に向けて一層の交流を深めるよい機会となった。また、現在生命農学研究科が実施している文部科学省国費留学生優先枠に応募を希望する5名の学生も講義に参加していた。模擬講義終了後の時間を利用して個別面談を行うことができた。

理学部での講義には残念ながら学生と教員を合わせて10名前後の参加者しか集まらなかった。出席していた教員からは、模擬講義の開催日がセメスターの第1週に当たったため、学部生は出席しにくいとの説明があった。また全体的に講義に対する参加者の反応も鈍かった。恐らく量子学という研究分野にあまりなじみがなかったようである。昨年、同大理学部で宇宙物理に関する模擬講義を実施した際にも、講義参加者から十分な理解が得られないという問題が生じた。改めて参加学生が関心をもつトピック選びの難しさを痛感した。その一方で大学説明会では、参加者のほとんどが本学や情報科学研究科(現情報学研究所)についての説明を、メモを取りながら熱心に聞いていた。カセサート大学では本学の知名度が高いため、本学への潜在的な留学希望者は多いと思われる。

2) Mahidol Wittayanusorn School での活動の概要

Mahidol Wittayanusorn School は中高一貫のスーパーサイエンススクールである。理系教育に特化した学校としてはタイでトップである。学生および教員は学校敷地内の寮に住み、毎日早朝から就寝時間までカリキュラムが組まれている。卒業生の海外大学への進学に熱心に取り組んでおり、イギリス・ケンブリッジ大学やオックスフォード大学、米国・スタンフォード大学など世界の有名大学にも卒業生を送り込んでいる。

今回は模擬講義に先立ち、校長である Dr. Nakapadungra を表敬訪問した。Dr. Nakapadungra は本学を含めた日本の大学への進学実績を細かく把握しており、積極的に在学学生を日本へ送り出そうとしているようだった。特に G30 を高く評価する発言が多くあった。今回の模擬講義のような試みは、学生が日本の大学の様子を知る良い機会になるので、歓迎すると

のことだった。また Dr. Nakapadungra からは以下の三つの要望が寄せられた。1 点目は奨学金の充実である。日本の大学を受験し合格しても、奨学金が受給できなかったため、進学を断念するケースが毎年あるとのことだった。特に Mahidol の学生は全員が奨学金を受けて高校へ入学しているため、自費で大学へ進学することが全く念頭にないようである。2 点目はさくらサイエンスプログラムへの参加である。同校は既にさくらサイエンスを利用して、学生を日本の大学へ短期訪問させている。ノーベル賞受賞者を輩出している本学は学生の間で関心が高いので、もしさくらサイエンスに採択されれば、意欲的な学生が多数参加するだろうとのことだった。最後に G30 の進学案内などを行う際に、卒業生の就職状況についても情報提供を行って欲しいとのことだった。特に本学はトヨタなどの一流企業との連携が活発なので、それが卒業生の就職にどの程度有利に働くのかを知りたいようである。

【理系講義】

村瀬 “Science under your feet – ecology of irrigated rice field soil”

ブシェーミ “The Quantum between ‘it’ and ‘bit’”

今回初めて高校で模擬講義を実施するにあたり、両講義とも G30 および NUPACE の学生を対象にした学部授業をベースに講義を組み立てた。農学(村瀬)の講義には教員と2年生の約20名の出席があった。同校は主にエンジニアリングに注力しているため、当初は農学に関心のある生徒はそれほど多くないのではと予想していたが、講義に対する反応はよく、講義内容を十分に理解していると推察された。イネの塩耐性など農学的なテーマで研究を行っている教員がおり、講義終了後には校内の実験室を見学した。生徒の取り組みに関する説明からは農学に対する興味も喚起していることが理解されるとともに、幅広い分野に興味を持つことのできる人材育成を目指す本校の理念が浸透していることを感じた。本学農学部の G30 Biology コースに応募している生徒にも面会する機会を得た。イネの研究を行っている教員とは今後も連絡をとることになった。

量子学の講義には特に物理および数学に関心のある学生が30名参加した(学年は不明)。学問の性質上、理論物理学、数学理論、ゲーム理論などを幅広く取り

扱う内容となったが、学生たち全員が熱心に耳を傾けていた。また講義を聴く様子から、講義内容についてもこちらが期待していた以上に理解している様子だった。何よりも、学校では教わらない未知の学問領域を理解しようとする意気込みが大変に高かった。計画では講義50分、質疑応答10分、その後参加者を対象に大学の説明会を15分行う予定だった。しかし、講義終了後参加学生から次々と質問が寄せられ、質疑応答時間が大幅に超過してしまった。結果として教室利用時間が過ぎてしまい、残念なことに大学説明会の時間が全く取れなかった。教室を出た後も数人の学生が講義担当者を廊下で待ちかまえ、また新たな質問をするなど、貪欲な知識欲には大変驚かされた。

3) チュラロンコン大学における活動の概要

チュラロンコン大学も昨年度に引き続いての訪問である。カセサート大学もチュラロンコン大学も本学が幹事校を務める AC21 の中心メンバー校である。本学のグリーンモビリティ連携研究センターがチュラロンコン大学などと JSPS 研究拠点形成事業に参加するなど、チュラロンコン大学との学術交流は着実に深化している。しかしその一方で、チュラロンコン大学から本学への留学生受入実績数は増えていない。名大巡講の開催を通じて、同大学の学生と直接交流する機会を設けたいと考えた。

【理系講義】

村瀬，ブシェーミ，大学説明会

両講義とも理学部 (Faculty of Science) にて行われた。チュラロンコン大学には農学系部局がないため、農学に関する講義 (村瀬) は理学部植物学科で実施した。当初受入部局が理学部であったことから、農学研究としての関連性は低いと思われていたが、講義に先立ったラボ見学 (ランを中心とした植物遺伝資源のライブラリー見学) でイネなどの農作物を対象とした基礎研究を行っていることが分かった。講義には教員と学生15名ほどが参加した。少人数でお互いの研究内容などを紹介しあい、率直なディスカッションをすることができた。同学部植物学科と生命農学研究科との将来的な協働の可能性を感じる事ができた。

量子学の講義 (ブシェーミ) は同学部物理学科にて行われた。教員と学部生、大学院生を合わせて20名ほ

どの参加があった。そのうち4名の学生が量子学に強い関心を持っていて、講義終了後に今後の学習に必要な参考文献の紹介などを求められた。また大学院で量子学を学びたいので、名古屋大学のように世界的に有名な大学に進学したいと話す学生もいた。

5. これまでの成果と今後のリクルーティングに向けた提案

上述したように、模擬講義を活用したリクルーティング、「名大巡講」の実施は平成28年度で3年目となり、徐々に活動の成果が表れ始めている。最後に成果の一部を紹介するとともに、今後の留学生受入戦略に対する提案をまとめたい。

既に文中で、中国科学技術大学やカセサート大学から模擬講義の直後に、NUSTEP への応募者があったことを紹介した。西安交通大学では模擬講義に参加した3名の学生が NUPACE に応募し、本年秋学期からの交換留学が決定している。また南京大学では同じく模擬講義に参加した複数の大学院生が、国費大使館推薦と CSC に応募して、本学での博士後期課程進学を目指している。これに加えて、中国科学技術大学とは、模擬講義に先立つ意見交換の場で要請のあったさくらサイエンスプログラムに共同申請することで合意し、現在申請に向けて準備を進めているところである。平成28年度の活動単体だけを見ても、現時点でこれだけの収穫があった。

しかしこれらの事例以上に名大巡講の成果として強調したいのが、大学院生の予備軍である研究生応募者の増加である。工学研究科および人文学研究科で2017年4月および10月入学の研究生に応募した学生の在籍・出身校を調査したところ、過去に名大巡講を実施した中国の協定校の割合が増加していた。本学に在籍する研究生の半数以上が工学研究科もしくは人文学研究科の2部局に在籍することを考えると、これは全学的に見ても大きな変化であると言える。そもそも名大巡講を実施するにあたり訪問先を協定校に限定しているには理由がある。それは学生の「質」の確保である。例えば、研究生の最大の送り出し国である中国における本学協定校は14校あり、その全てが211工程大学である。そのうち12校は大陸中国の大学ランキングで20位以内につけている。中国トップクラスの協定校からの入学者の増加は、留学生が増えるという単純な

数字の上での変化だけではなく、本学に学生の「質」の向上をもたらすのである。留学生のリクルーティングにおいて学生の質と量のバランスをいかに図るかは非常に難しい課題であるが、名大巡講は質量ともに安定した留学生の確保という成果を徐々に表し始めていると言える。

一方で、名大巡講のようなリクルーティング活動に限界があることもまた事実である。毎回講義のたびに本学に関心を持った学生に対してはできるだけフォローアップを行っているが、それでも実際の出願に結びつくような支援としては不十分だと言わざるを得ない。やはりリクルーティングで接した学生が出願に至るまでを支援する全学的なアドミッション支援体制の

確立が不可欠である。特に本学を含め日本の大学院のアドミッション制度は世界的に見て独特であり、留学志願者にとって一つの妨げになっている。国際教育交流センター教育交流部門では一昨年度に「研究生制度・大学院入試改革WG」を設置し、留学志願者にワンストップで対応するアドミッション支援制度の導入と、国際的なスタンダードである海外からの直接入試の実施について議論してきた。特に全学的なアドミッション支援の窓口となる「アドミッション支援サイト」の構築に向けた準備を進めているところである。今後は名大巡講などの全学的なリクルーティングの成果を最大化させるようなアドミッション支援の在り方についても議論していきたい。